

○吉澤千夏* 大瀧ミドリ** 松村京子***

(*兵庫教育大・院 **上越教育大 ***兵庫教育大)

《目的》Schank & Abelson (1977) によって提唱されている“スキプット”の概念は、「日常的に行なわれる活動の時系列的手順に関する知識」を意味しており、近年、その獲得と発達過程について様々な研究が行なわれている。

例えば、Nelson & Seidman (1984) は、幼児がごっこ遊びをする際、スキプットが基本的な枠組として機能すると報告している。また、Seidman, Nelson & Gruendel (1986) は、スキプットの共有が、母子や仲間との遊びをより発展させることを示唆している。

そこで、本研究は1歳児とその母親のままごと遊びの分析を通して、1歳児の持つ食に関するスキプットの構造とその特徴について明らかにすることを目的としている。

《方法》対象者は、上越市周辺地域に在住する1歳児(±2週間)とその母親54組である。玩具を設置した観察室での自由遊びの様子をVTRに録画し、ままごと遊び場面を抽出し分析対象とした。スキプットの構造を捉えるカテゴリーは、38種のMainスロットと35種のSubスロットで構成されている。カテゴリーの決定にあたっては3組を抽出し、ままごと遊び中の発話と行為についてその意味を間主観的に捉え、10回以上現れた発話・行為(スロット)を、Mainスロット及びその他のものをSubスロットとした。カテゴリーの分類にあたっては、映像をコンピュータ画面に取り込み、5秒毎にファイルを作成し、各ファイル画面における発話・行為の発生頻度をチェックした。

《結果》スキプットの形成は、子どもの生活の中で主要行為である“食べる”行為に直接関わるスロットに集中する傾向等がみられた。